

“聖書は女性のマグナ・カルタ”：  
ジェニー・F・ウィリング（1834－1916）と  
19世紀メソヂスト女性の活動主義の源

棚村恵子

はじめに 19世紀アメリカという時代と場所：メソヂスト運動の成功と変容  
アメリカ宗教史家S・E・オールストローム (S.E.Ahlstrom)は、その大著『アメリカ国民の宗教史』において、19世紀初頭の第2次大覚醒運動 (The Second Great Awakening：以下「第2次大覚醒」と略す) によってアメリカ宗教界に起きた神学的大変化を「アルミニウス主義、完全主義、行動主義への傾斜」だといみじくも指摘している<sup>1</sup>。19世紀のアメリカ宗教界は、教派によらずその三つの特徴をめぐって激しい内部分裂を起こしつつ、結果的にその神学的特徴は19世紀のアメリカのキリスト教の主流派を形作った。長老派、会衆派、改革派、バプテスト派においては、教理をめぐって旧派カルヴァン主義 (The Old School Calvinism) と新派カルヴァン主義 (The New School Calvinism) に分裂し、内部抗争を起こした<sup>2</sup>。その影響は19世紀最大のプロテスタント教派であるメソヂスト派にも及びはしたが、メソヂスト派の場合は、1880

---

<sup>1</sup> Sidney Ahlstrom, *A Religious History of the American People*, New Haven and London: Yale University Press, 1972, 470.

<sup>2</sup> 改革派陣営に起きた新派カルヴィニズムの神学とその陣営が関わった社会改良運動 (反奴隷制運動、反カトリック運動、禁酒運動など) については Leo P. Hirrel, *Children of Wrath: New School Calvinism and Antebellum Reform*, The University Press of Kentucky, 1998. ハーレルの研究により新派カルヴァン主義の神学思想と社会改良運動とが分かちがたく結ばれていたことが明らかにされている。

年代までは長老派とは異なり内部に抗争を抱えつつも長老派のような決定的な四分五裂状態には至らなかった<sup>3</sup>。メソディスト派の場合は、早い時期に奴隷制問題で南北に分裂したが、神学問題においては、上記三つの神学的変化を抱えたままメソディスト内部にウェスレーの神学から微妙に変化したアメリカ独特のメソディズムの発展を促した。アメリカにおいて 19 世紀が「メソディストの世紀」と呼ばれるように、メソディスト派の飛躍的伸張をもたらしたのは、オールストロームが指摘した神学的大変化がメソディズムの中に起こったためである。それが成功の要因であると同時に、20 世紀から今日へとつながるメソディスト派をはじめとするアメリカ・プロテスタント主流派の長い神学的なりべら化の始まりでもあったことを見逃すことはできない。

メソディスト派の神学思想家ロバート・E・チャイルズ (Robert E. Chiles) は『アメリカ・メソディズムにおける神学的変遷：1790-1935』においてメソディズムの 19 世紀アメリカにおける神学的変遷をいみじくも三つの変遷、すなわち「啓示から理性へ」、「罪深い人間から道徳的人間へ」、「無償の恩寵から自由意志へ」で表現している<sup>4</sup>。チャイルズによると 19 世紀メソディズムを特徴付けたリバイバル神学は、19 世紀の科学的世界観や哲学的発展、さらにアメリカ人のもっとも大切な価値である「自由」に適応させるために伝統的なウェスレーの神学を変容させた。この変化は不可避であったし、同情の余地があるとはいえ、ウェスレー神学にとっては致命的変化であったとしている。この変化がいかに致命的であるかは、「人間は信仰を通して恩寵によってのみ義とされる」という新約聖書の主張に変化をもたらすからだとチャイルズはその研究の冒頭に示す<sup>5</sup>。

オールストロームとチャイルズが指摘する 19 世紀のアメリカにおける変化は一方でメソディズムの比類ない活力を生み出したが、神学的にはリべら化を促した。19 世紀メソディズムの成功の要因は、内部に抗争を持ちつつも長老派ほどには四分五裂を起こさずアメリカの風土に適応した点に帰せられるが、

---

<sup>3</sup> Ahlstrom, 817-8.

<sup>4</sup> Robert E. Chiles, *Theological Transition in American Methodism 1790-1935*. New York: Abingdon Press, 1965, 7-19. 引用は目次より。

<sup>5</sup> *Ibid.*, 16.

一方でメソヂスト派の創始者ジョン・ウェスレー (John Wesley) の神学からの様々な変容をもたらしたと言える。

## 1 本論文の問題意識と内容

オールストロームが指摘する「アルミニウス主義、完全主義、行動主義」は、アメリカ 19 世紀初頭に起きた第 2 次大覚醒に端を発している。そのリバイバル神学の代表的指導者チャールズ・G・フィニー (Charles Grandison Finney: 1792-1875) はプロテスタント各派に大きな神学的変化をもたらした。彼はオベリン大学の創立者でもあるが、リバイバルは奇跡ではなく、適切な方法を正しく使うことによって起こされうるとして、回心を生む効果的説教だけでなく、さまざまな「新しい方法 (new measures)」を考案した<sup>6</sup>。

リバイバル神学者たちが強調した回心への人為的方法や計画をめぐって、当然のことながら各教派に議論と亀裂を生み出した。しかし、各地で開かれるキャンプ・ミーティングが續々と回心者を生み出し伝道的効果が上がるにつれ、新しいリバイバル方式は教派間の信徒獲得競争が激しかった当時、主流派教会が回心者を得る有効な方法として採用されるに至った。

メソヂスト派においてはその影響はホーリネス (聖潔: Holiness) 運動として現れ、領土拡大期のメソヂスト派に飛躍的伸張と成功を与えた。悔い改めと潔めの内的経験を強調するその神学は、神の絶対主権を主張する宗教改革的「義認と聖化」の神学とは異なり、人間の側の主体的決断や悔い改め、献身を要求する。ホーリネス運動をめぐっては、メソヂスト派内部に議論を生みだしていくことにはなるが、当座は奴隷制をめぐってのようには、メソヂスト監督派の分裂には至らなかった。

この運動の神学は、ウェスレー自身がアメリカのメソヂストたちのために定めた 25 箇条の『宗教箇条』(1784)に示された原罪論、救済論において異なっているものの、その運動がアメリカの教会に伝道力と活力を与えたことは事実である。本稿では、メソヂスト派の伝道に大きな貢献をなした女性たちの

---

<sup>6</sup> Charles Grandison Finney, *Lectures on Revivals of Religion*, originally published in New York by an unknown publisher, 1835, 238-262 in Nabu Public Domain Reprints.

海外伝道運動においてその神学的特徴がどのような活力と変容を生んだか、そしてそれが国内のみならず、宣教師を通して日本にまでもたらされたかについて検討を試みる<sup>7</sup>。

本稿で取り上げる J・F・ウィリング (Jennie Fowler Willing: 1834-1916) はホーリネス運動に参加した活動的婦人伝道者であり、南北戦争後メソヂスト監督派に留まりつつ女性の指導者としてメソヂスト監督派の女性たちを強力にホーリネス的活動主義に導いた。そして彼女の活躍とリーダーシップがメソヂスト監督派に与えた影響はアメリカ本土にとどまらず、宣教師を通して遠く日本にも及んだ。

明治 7 年のドーラ・E・スクーンメーカー (Dora E. Schoonmaker: 1851-1934 青山学院創立者のひとり) の来日以後、メソヂスト監督派婦人海外伝道局の初期の女性宣教師たちは、ウィリングの指導を直接間接に受けた者たちで、その影響の下に日本女性をホーリネス的福音理解と活動的女性観に基づいて教育した<sup>8</sup>。ウィリングからスクーンメーカーへ、スクーンメーカーから小崎千代 (小崎弘道の妻、結婚前は岩村姓) から日本女性たちへと伝えられた「福音」と新しい活動的女性観は、専業主婦の余暇と無償労働を前提とした「清く、正しく、勇ましく、忙しい」教会婦人像の源となった。本発表はウィリングの活動主義の源であった神学を分析し、日本人女性が受け取った「福音」と女性観とはどのようなものだったかを検証する。

## 2 ウィリングの活動的人生と、「完全な聖化」の経験

### 1) ウィリングの活動的人生：清く、正しく、勇ましく、そして忙しく！

---

<sup>7</sup> 19世紀アメリカにおける新派カルヴィニズムと旧派カルヴィニズムの対抗が宣教師を通して日本にもたらされたことに関しては以下を参照。棚村重行『二つの福音は波濤を越えて：十九世紀英米文明世界と「日本基督公会」運動および対抗運動』教文館、2009。

<sup>8</sup> メソヂスト監督派の婦人海外伝道局の結成、ウィリングの役割、スクーンメーカーとの関係などについては拙著『しなやかに夢を生きる：青山学院の歴史を拓いた人、ドーラ・E・スクーンメーカーの生涯』青山学院、2004。

## "聖書は女性のマグナ・カルタ"

J・F・ウィリングは1834年にカナダに生まれ、子供のときに家族とともにアメリカ合衆国イリノイ州のニューワークに移住した。虚弱体質のため学校に通えず、彼女は家庭での自学習によって少女時代を過ごした。15歳で地元の小学校の教師となり、19歳でメソヂスト監督派の牧師、ウィリアム・ウィリングと結婚した。夫婦はニューヨーク州のいくつかの教会を経て、1860年にイリノイ州に移った。夫婦がまだニューヨーク州にいたころ、夫人はホーリネスのリバイバルに参加し、ホーリネス的「完全な聖化」(entire sanctification)の経験を得て、自ら積極的に伝道に携わるようになった。以後、牧師夫人でありつつイリノイ・ウェスレーヤン大学英文学教授、婦人キリスト教禁酒同盟、婦人海外伝道局、婦人国内伝道局等の指導的役員、ニューヨーク・セツルメントハウス創立者、伝道者養成学校校長、著作家(17冊の本、200の雑誌記事)として多忙で活動的なクリスチャン女性として活躍した。メソヂスト監督派において女性の按手が認められていなかった当時、ウィリングは説教の資格が与えられた少数の女性の一人であった。彼女は正規の学校教育も神学教育も受けてはいなかったが、自己訓練と自学習によって1873年(39歳)にメソヂスト監督教会より説教者の資格を得た。一言でいえば、「自助努力の塊」のような女性活動家の典型と言えよう。

日本で初めてメソヂスト監督派の女学校(のちの青山学院につながる)を創立した婦人宣教師ドーラ・スクーンメーカーは、イリノイ州出身で、ウィリングと深いつながりがあった女性である。スクーンメーカーは、来日前にメソヂスト監督派婦人海外伝道局ノースウエスタン支部通信書記であったウィリングの秘書をつとめ、その助言によって日本に派遣された<sup>9</sup>。スクーンメーカー自身がホーリネス的回心の経験をもっていたかは不明であるが、ウィリングの指導の下に宣教師となり、その指示のもとに5年間の日本での仕事をなしたことは事実である。ウィリングは宣教師をはじめ、その事業を支えた全米の支持者たちに対して機関紙を通して自身のホーリネス的行動主義を伝えたので、その影響は本国アメリカにとどまらず、婦人伝道局を通して

---

<sup>9</sup> 前掲書 69-75。

世界へと派遣される婦人宣教師たちによって世界各地に建てられた女子教育機関に及んだ。

## 2) ウィリングの「聖化」の経験

それでは、ウィリングを活発な行動主義へと誘った「完全な聖化」体験はどのようなものであったかを次に検討していこう。思春期の青年たちに書いた著作『15歳から25歳の人たちへ』には、彼女自身の体験がつつられている。それによると彼女は、あるとき、利己的満足を求めていたことを悔い改め、神への徹底的服従 (surrender) を決心した。その結果、「完全な聖化」を経験したという<sup>10</sup>。

ウィリングの神学思想の特徴については4章で詳しく分析するが、彼女の使う用語には、神学的には「義認」よりも「聖化」が強調され、それこそが救済体験となる。しかも「聖化」は自らが徹底的に悔い改めるという「自己放棄」が契機となる。宗教改革的教理で言うならば、無償の恩恵として神が罪人を義とする行為が先にある聖化という道はそれに続くのだが、ウィリングの場合は自分の道徳的悔い改めと徹底的献身が先行し、それを神が義とされて「完全な聖化」が与えられると主張する点に特徴がある。

ウィリングが影響を受けたホーリネス運動とは、アメリカのメソヂスト内部で起きた完全主義運動で、その創始者の一人であり、運動のプロモーターでもあったフィービー・パーマー (Phoebe Palmer: 1807-1874) という女性の場合は、ウィリングの経験とは異なる非常に女性特有のものであった。彼女の場合は子供を亡くす経験により自分が信仰よりも子供を優先させていたことを悔い改め、徹底的献身 (「祭壇にすべてを捧げる」) をめざした結果、神が「完全な聖化」の確信を与えたというものであった<sup>11</sup>。

自らの生き方への悔い改めが契機となって徹底的献身へ、聖化の確信へと至ったウィリングやパーマーの例で明らかのように、その行動主義、完全主義的

---

<sup>10</sup> Jennie Fowler Willing, *From Fifteen to Twenty-Five*, Chicago: The Christian Witness Co., 1920, 75-77.

<sup>11</sup> Priscilla Pope-Levison, *Turn the Pulpit Loose: Two Centuries of American Women Evangelists*, Palgrave Macmillan TM, 2004, 62-63.

## "聖書は女性のマグナ・カルタ"

信仰は、人間の側の努力や自律を促す 19 世紀アメリカ的風土に合致し、実際多くの女性たちを伝道へ、社会的な行動主義へと駆り立てた。移民がどんどん流入し、都市のスラムが様々な問題を抱える時代に社会を変革する国内伝道や海外伝道、禁酒運動や反カトリック運動など 19 世紀アメリカ社会を彩ったキリスト教社会改良運動のほとんどは、このような神学的傾向をもっていたと言えよう。それは、自らと他者と社会を変革し、「清く、正しい」と彼女たちが信じる社会を実現するたえようもないエネルギーを提供した。その活動主義を支えた神学的傾向について以下さらにウィリングの著作から分析を試みてみよう。

### 3 ウィリングの活動的女性観：「完全な聖化」から「神の協働者」に

ウィリングは、その活動的女性観の根拠を聖書に置いた。「聖書は女性のマグナ・カルタ」だと言う彼女にとって、特に彼女が注目する聖書箇所は「使徒言行録」2 章に描かれた聖霊降臨の出来事である<sup>12</sup>。2 章 14 節以降に記されたペトロの説教の中に引用されている旧約聖書ヨエル書からの引用には次の言葉がある。

『神は言われる。終わりの時に、わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたたちの息子と娘は預言し、若者は幻を見、老人は夢を見る。』

この言葉は、女性が人前で説教することを聖書が認めたことであり、それは女性の権利の保障、「マグナ・カルタ」であるとウィリングは考えた。

また、「ガラテヤ信徒への手紙」3 章 26-28 節にあるパウロの言葉「キリストにあっては男も女もない」も女性たちの権利を保障する聖書箇所としてウィリングはさまざまな著作において好んで引用した。これらはウィリングにとって社会や教会における男女の平等と女性の活動的生を促す聖書の根拠であった。

しかし、それらの聖書箇所と、彼女が告白するホーリネスの経験とはどのように結びつくのであろうか。確かに、「使徒言行録」第 2 章冒頭には、エルサレムでの聖霊降臨の出来事が記され、一つに集まっていた男女に聖霊が下った

---

<sup>12</sup> Jennie Fowler Willing, *The Potential Women: A Book for Young Ladies*, Boston: McDonald & Gill, 1886, 12.

と記されているが、それらは弟子たちによる悔い改めや徹底的献身の決心の結果として起きた出来事とは描かれてはいない。むしろ、その聖霊降臨の経験があつて初めて弟子たちは、自らの罪を自覚し悔い改めと伝道への意欲が生じたのであつて、その逆ではない。また、ウィリングが好んで引用する「ガラテヤ信徒への手紙」3章26-28節の箇所は、男女平等の議論ではなく、パウロの信仰義認に関する文脈で述べられていて、「律法による義」ではなく「信仰による義」においては男女も民族も社会的身分の違いもないという意味である。ウィリングが女性に権利を保障する「女性のマグナ・カルタ」として上記の聖書箇所を引き合いに出したことは、文脈から考えて問題が残ると言わざるを得ない。

ウィリングにとっては、しかし、それらの聖書箇所は、女性の権利を保障し、キリスト教会における男女平等主義を強力に推し進める根拠と考えられた。ウィリングにとって女性は男性と同等の神の国の有用な働き人であつた。

さらに、男性と同等であるというばかりでなく、ウィリングはその著書において、女性はキリストの「協働者 (co-worker)」であると述べ、女性の使命は、魂を獲得する (soul-winning) ことにおいて役立つ (useful) 人間になることであるとしている<sup>13</sup>。そのために女性は強く、たくましく、賢く、能動的、自立的であるべきであり、ヴィクトリア的女性観に見られるような男性への依存やしとやかさといった「女性らしさ」から程遠い理想像が語られる。このような活動的女性像は、婦人キリスト教禁酒同盟のように、女性たちに国内にはびこるアルコール等諸悪弊を改良する使命感を与えただけでなく、遠く海外の国々においても同様の活動をもたらすエネルギーと大義を与えた。ウィリング自身、婦人キリスト教禁酒同盟、国内伝道、海外伝道、都市のセツルメントといった諸活動に献身的に参加し、そのリーダーをつとめている。まさに神の「協働者」として役に立つ女性の典型であつた。

ウィリングの思想からいうならば、彼女の行動主義、完全主義はホーリネスの回心が発端であり、その回心における人間の側の悔い改めと献身の決心が、

---

<sup>13</sup> Jennie Fowler Willing, *Diamond Dust*, Cincinnati: Walden and Stowe, 1880, 225. 及び Pope-Levison, 76.

「潔められた」女性の行動主義を生み出した。その思想は、神の側の人間に対する献身よりも人間の側のキリストに対する献身や主体性に強調が移行している。本来、聖書は神の救いの行為（キリストにおける神の自己献身）を証しする神からの啓示であるが、ウィリングにとって聖書は悔い改めと自己献身をした女性に尊厳と権利を認める重要な根拠と考えられたのであった。

#### 4 ウィリングの神学思想：人間中心主義への移行段階

次に、ウィリングの行動主義を生み出した神学思想をさらに解明するために彼女の原罪論と救済論について分析してみよう。

ウィリングは、その著書『ダイヤモンドの粉』において、人間の原罪について、それは「神の律法に反抗する傾向、癖」だと考える<sup>14</sup>。それは自由意志によって悔い改めることが可能で、人間は罪を捨て良い人生を選ぶことができるのである。ウィリングは人間の側の悔い改めと自己放棄の可能性を認め、自分の責任によって新しい生き方を選ぶことができると考える<sup>15</sup>。

それでは、ウィリングにとってキリストの十字架の死の必然性や、その死は人間に何をもたらすというのだろうか。ウィリングによるとキリストの死は「個人的悔い改めと信仰という条件ですべての人のために」なされた贖罪ということになる<sup>16</sup>。無条件の恩寵が先行するのではなく、条件付きの贖罪であり、聖化に関しては、悔い改めと自己放棄を神が受け入れてくださる結果、「完全な聖化」が恩寵として与えられるというわけである。

したがって、ウィリングの神学思想は、神の側の絶対主権を主張する宗教改革的福音主義から明らかに変化し、救いを神と人間の共同作業とみなす神人協力主義的アルミニウス主義へと傾斜していることが窺える。もちろんそれは、完全な自力主義や人間中心主義（ヒューマニズム）ではないが、その移行段階とみなすことができるのではないかと考える。

---

<sup>14</sup> Willing, *Diamond Dust*, 227.

<sup>15</sup> Jennie Fowler Willing, *The Little Book Man*, New York: Hunt & Eaton, 1894, 122.

<sup>16</sup> Joanne Carlson Brown. "Jennie Fowler Willing(1834-1916): Methodist Church Woman and Reformer," Ph.D. Dissertation: Boston University, 1983. 14.

## 5 ウェスレーの『宗教箇条』から『カテキズム No.1』へ、さらに 日本メソジスト教会蔵版『教會問答』へ

以上検証したウィリングの神学思想は、そもそもJ・ウェスレーの神学思想とどう異なるであろうか。そのための材料として25箇条からなる『宗教箇条』を取り上げてみよう。これは、ウェスレーによってアメリカのメソヂストたちのために1784年に定められたもので、改定を経て1804年にメソヂスト監督派によって正式に採択された。その『宗教箇条』第9項に義認について以下のように書かれている。

### 「IX 人間の義認について

我々が神の前で義とみなされるのは、我々の主にして救い主イエス・キリストの功績によってのみであり、信仰によってであって、我々自身の業や相応しさによるのではない。だから、信仰のみによって義とされることは、非常に健やかな教理であって、極めて慰めに満ちている。」<sup>17</sup>

これによると「信仰のみによって義とされる」という宗教改革的福音主義の救済論が貫かれており、そこには何ら救済の条件は付けられていない。

ここで、湧き起る疑問は、次のようなものである。メソヂスト監督派の家庭で育ち、その牧師と結婚したウィリングがホーリネス運動にかかわることによって初めて「悔い改めと信仰という条件」による救済論に変わったのであろうか。それとも、メソヂスト監督派自体が19世紀に入ってから変容をとげたのであろうか。

驚くべきことに、アメリカのメソヂスト監督派が1852年に作成した『メソヂスト監督教会カテキズム No.1』(以下『カテキズム No.1』と略す)には、以下のような「救済の諸条件」が登場する。

### 「§2 救済の諸条件

問い45 それではすべての人間が救われるのであろうか？

答え いいえ、そうではない。『悪人は地獄に墮ちるであろう。そして

---

<sup>17</sup> Philip Schaff, *The Creeds of Christendom, 4<sup>th</sup> ed., Vol.3*, Grand Rapids, Michigan: Baker Book House, 1977, 809.

神を忘れるすべての国々も同様である』(詩編9:17)

問い47 善悪を知るものはどのように救われるか

答え 神への悔い改めと我々の主イエス キリストへの信仰が条件となる。

問い49 いかにして真実の悔い改めが示されるか

答え 罪を捨て、神に真剣に向くことによってである。<sup>18</sup>

ウェスレーの『宗教箇条』と『カテキズム No.1』とを比較して明らかのように、後者、すなわち 1852 年にメソヂスト監督派が作成した信仰問答においては、救いの条件として「悔い改め」が加わっている。これが 1852 年当時のメソヂスト監督派の公式なカテキズムだったということは、ウィリング自身がホーリネスの回心経験を得る前に、この『カテキズム No.1』によって少女時代に教育されたことを意味する。第 2 次大覚醒の火があらゆる教派に及び、リバイバル神学がそれまでの伝統をくつがえして新しい福音理解で塗り替えていく嵐のような変化の時代にウィリングは生まれ育った。彼女がホーリネス運動にかかわる以前にすでにメソヂスト監督派はウェスレーの伝統から変化していたと考えられよう。

それではアメリカのメソヂスト監督派が、いつどのような経緯でウェスレーの『宗教箇条』に対してこのような重大な改変を行ったのであろうか。この問題の解明は本論文の課題ではないので別の機会に譲るが、本論文との関係で注目すべき事実は、その『カテキズム No.1』が、メソヂスト監督派が世界に派遣した宣教師たちによって、各国語に翻訳され、教理教育に用いられたことである。

日本にメソヂスト監督派の宣教師が初めて宣教を開始したのは、キリシタン禁止の高札が降ろされた年の 1873 年(明治 6 年)であった。3 年後の 1876 年に『耶蘇降世千八百七十六年 教會問答』(以下『教會問答』と略す)が出版され、スクーンメーカーら宣教師によってミッション・スクールや教会、日曜学校において宗教教育のテキストとして用いられ、生徒たちはこれを暗唱させ

---

<sup>18</sup> *Catechism of the Methodist Episcopal Church No.3*, New York: Carlton & Porter, 1852.12. 本論文で使用した史料は、タイトルに No.3 と付されているが、No.1 が収録されており、『教會問答』はその No.1 を翻訳したものである。

られた。

以下は『教會問答』の「救いの諸条件」と題した部分である。

「問い47 善悪を分別せるものはいかにして救ひを得べきか

答え 神のまへにくい改めてわが主イエスキリストを信ずればすくひを得べし

問い48 悔い改むとは何ぞや

答え おのれのおかししつみを神のまへに悔いてあらたむるをいふなり」<sup>19</sup>

日本の少年、少女たち、大人の求道者たちがこの『教會問答』によって宣教師たちからキリスト教信仰のイロハを学び、暗記した。太平洋を挟んでアメリカと日本で同じ教育の材料とされた『カテキズム No.1』と『教會問答』がメソヂスト監督教会の公認のものである重大性を鑑みると、いかに19世紀と言う時代にオールストロームやチャイルズが指摘した変化がアメリカ・プロテスタント最大の教派であったメソヂスト派の中に起き、その影響は、アメリカ国内だけでなく宣教師を通してアジア各地、南米、東ヨーロッパなど全世界に及んだことが分かる。

女子教育に関して言うならば、ウィリングらホーリネス的指導者たちによって育てられた宣教師たちが海を渡り、ミッション・スクールや日曜学校を通して日本の少女を日本語に翻訳された『教會問答』によって教育し、「神の協働者」としての活動的生へと誘った。例えば小崎千代は、スクーンメーカー宣教師の最初期の生徒であるが、海岸女学校（のちに青山女学院となる）を卒業してから牧師夫人、幼稚園園長、婦人キリスト教禁酒同盟副会長、青山女学院同窓会長として多忙な社会活動、教会活動に勤しんだ。この新しいタイプの日本女性たちは、当時の良妻賢母主義によって育てられた日本女性には見られない社会性をもち、学校、教会、団体に活躍した。一世を風靡したそれら女性たちの活動と女性観は、オールストロームがいみじくも指摘する「アルミニウス主義、完全主義、行動主義」的19世紀アメリカ・プロテスタントの特徴的福音理解

---

<sup>19</sup> 『耶蘇降世千八百七十六年 教會問答』日本メソヂスト教會蔵版、1876。10-11。青山学院資料センター蔵。

の輸入の結果であると考えられるのではないだろうか。

## 終わりに

以上、本稿において 19 世紀アメリカ教会女性の典型ともいえるジェニー・ウィリングの活動主義と女性観の源が、そのホーリネス的救済論、人間論、聖化論にあったことをその著作から検証した。そしてウィリング個人のみならずメソヂスト監督派全体が、オールストロームやチャイルズが指摘する 19 世紀のアメリカ・プロテスタンティズムの大変化というマクロな背景の中にあつたことを見てきた。その変化は確かに 19 世紀のアメリカ女性たちを活気づけ、伝道活動や種々の社会改良運動にかかわる道を開くことに寄与した。さらに、それはアメリカ国内に留まらず、婦人宣教師たちを通して海を隔てた日本女性たちを同様の活動主義に導き、教会婦人の典型を生み出した。

しかし神学的、教理的に見れば、人間の主体性に強調を置くウィリングの思想と福音理解は、ウェスレーの 25 箇条の『宗教箇条』に見られる宗教改革的福音理解とは異なっており、見逃せない重要な変容であつた。その変容はウィリング個人だけでなく 19 世紀のメソヂスト監督派の認可した『カテキズム No.1』にも見られるように、アメリカのメソヂスト運動そのものの中に見られ、19 世紀後半から 20 世紀へとさらなるリベラル化へとつながる移行段階を準備した。つまり、メソヂスト運動そのものが 19 世紀という時代、アメリカという場所に移植されたがゆえに起きたホーリネスの変容が、運動の成功をもたらすとともに、チャイルズが指摘するメソヂズムのリベラル化への移行を用意した。ウィリングはその神学的移行期を体現した人物であつたといえる。

本稿が試みたウィリングの神学思想研究が、アメリカのメソヂスト運動の神学的解明のみならず、日本人キリスト者がどのような福音理解を宣教師から受け継いだのかという自らの DNA 解明に貢献することを願う。

## 参考文献

(第 1 次史料)

Finney, Charles Grandison. *Lectures on Revivals of Religion*. Nabu Public Domain

Reprints, originally published in New York by an unknown publisher, 1835.

Willing, Jennie Fowler. *The Potential Woman: A Book for Young Ladies*. Boston: McDonald & Gill, 1886.

\_\_\_\_\_. *Diamond Dust*. Cincinnati: Walden and Stowe, 1880.

\_\_\_\_\_. *Little Book Man*. New York: Hunt & Eaton, 1894.

\_\_\_\_\_. *From Fifteen to Twenty-Five*. Chicago: The Christian Witness Co., 1920.

Pope-Levison, Priscilla. *Turn the Pulpit Loose: Two Centuries of American Women Evangelists*. Palgrave Macmillan TM, 2004. 資料集。

Schaff, Philip. *The Creeds of Christendom, 4<sup>th</sup> ed., Vol.3*: Grand Rapids, Michigan: Baker Book House, 1977.

*Catechism of the Methodist Episcopal Church No.3*, New York: Carlton & Porter, 1852.

『耶蘇降世千八百七十六年 教會問答』日本メソジスト教會版、1876. 青山学院資料センター蔵。

(第2次史料)

Chiles, Robert E. *Theological Transition in American Methodism 1790-1935*. New York: Abingdon Press, 1965.

Ahlstrom, Sydney E. *A Religious History of the American People*, New Haven and London: Yale University Press, 1972.

Brown, Joanne Carlson. “Jennie Fowler Willing (1834-1916): Methodist Churchwoman and Reformer,” Ph.D. Dissertation : Boston University, 1983.

Hirrel, Leo P. *Children of Wrath: New School Calvinism and Antebellum Reform*, the University Press of Kentucky, 1998.

棚村恵子 『しなやかに夢を生きる：青山学院の歴史を拓いた人、ドーラ・E・スクーンメーカーの生涯』 青山学院、2004。

棚村重行 『二つの福音は波濤を越えて：十九世紀英米文明世界と「日本基督公会」運動および対抗運動』 教文館、2009。

(東京女子大学 准教授)